
短編しゅう

はにやえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編しゅう

【コード】

N5213S

【作者名】

はにやえ

【あらすじ】

思いつき短編。気まぐれ更新です。

はなの、お名前

桜の樹の下には、死体が埋まっている

そんな伝説を初めて知ったのはいつの事だったか。

確かに大概の日本人に好かれる春の代表花として、昔から親しまれているから妙な話の一つや二つはあったって不思議じゃない。

「ふ、ふーん。そうなんだ」

幼なじみは怖がりだ。本人は決して認めないが。

「で、今度の土曜は天気が良いから花見をしよう」

「この流れでお花見になる意味が分からないよ……」

気にするな。

絶好の花見日和。晴れ渡る上天気。

時折起こる風が、二週間咲いていてもなお惜しまれ、限りなく白に近い薄い薄い紅色を散らす。

「わあ…見事だねえ」

「そつだな」

この間の話しは忘れたのか、ただただ散る花びらに魅入る幼なじみ。しばらくは景色を楽しんでいたいのだが、休日の晴天、さらに明日は雨降りの予報の為か、今年最後となる花見に繰り出した人は多く落ち着いて鑑賞などは到底無理だった。

「いたた。す、いません」

人の流れに乗るとはいささか言い難い幼なじみの、フラフラとした歩みに回りの人が迷惑するからと手を繋ぐ。

「桜に見とれるとかならともかく、どうして足元見えてそんなフラフラ歩くんだよ？」

自分と比べ、ずいぶん華奢な手は、力加減を間違えると痛めてしまいそうで怖かった。それでも、時々コケそうになる時はフォロイしなければならず緊張する。うん。いつコケるとも分からないからな、コイツ。

「うん？えーと。あんまり根本は歩きたくないな。なんて…」

「ああ、根っこ傷めるからな。柵でもたてりゃいいのに」

「あつ、そ、そうだよね」
「ん？もしかして」

「…まだあの話し信じてんのかよ」

「しし信じてないよ！不気味だなとか、踏んじやったら可哀相とか

思っていないよ？」

手の内の小さな右手が、ギクリと強張る。
おいおい。

「あのな、桜が血で染まった色なら、もっと赤い花はどうなるんだ？」

「し、信じてないもんそんな話。…赤い花って例えばどんな花？」

「そうだな」

赤い、赤い…

「椿とか」

「そっか。でも、どちらかと言えばローズピンクのような」

「あほう。桜の方が遥かに薄いわ。梅とか」

「あっ、確かに赤いのあるよねっ」

「ボケとか」

「……………わかった」

それ以降、幼なじみは桜の下を恐がらなくなった。奴いわく「最初から信じてなんかいない」らしいが。

それでも、桜並木を歩く時は覚束ない足取りなので毎年の花見に手を繋ぐ理由には事欠かない。

今年も桜は、満開になった。

かわらない華奢な右手は、今も自分の左手にある。

失敗する

ドタドタドスン。

不意に二階の部屋から物音がした。

一人暮らしの今、自分以外に音をたてる存在が居るのは常識的に考えておかしな事。

けれど

「久しぶりだなあ」

と、慣れた様子で家主は呟き念の為とタオルと薬箱を持ち階段を上がって行った。

「ああ、すいません、またお邪魔しています」

いつもの部屋に入ると、いつもと同じ姿勢で謝る男がいた。

腰から直角に下げられた頭には、相変わらず二本の角が生えている。

「ん。今回は怪我、無いようだね」

要らなくなった箱を机に置き暫くぶりの侵入者を見る。

上げられた顔色は、随分悪いようだ。目の下に濃い隈が出来ている。記憶にある姿よりも、やつれているようだ。

「何か無理してない？ 凄い顔になってるけど」

いかにも寝不足疲労困憊といった男は、元々色は白かったがこんな青ざめた顔色では無かったはずだ。

忙しいのだろうか。

「はあ。締め切りが重なってまして。上から責めつけられて久々の失敗をしまいましたよ」

ここ一月、まともに寝ていませんははと虚に笑う男に、救急箱に入ってたマルチサプリを何かの足しにと渡す。
どうせ試供品だ。

「それより、また汚してしまいましたね。重ね重ね申し訳ありません」

確かに『実験』とやらに失敗するたび騒音と共に何故かやって来る男は、来る拍子に部屋の中をめちゃくちゃにする。

本人に悪気がある訳でなし、いつもの事なのでここにはあまり物を置いてない。

殺風景。と訪れた友人にやや不評な内装も、その理由も言えずにいっしょに自分の部屋に物を置かない事が標準となってしまうていた。

「今度はどれ位で帰れそう？」

「ええとですね。今回使用したマヌイの粉は…」

何やらぶつぶつと計算し

「おおよそ二日かと……」

恐る恐る、といった目で、家主を見詰めた。

いいよもう。いつもの事だし。

「とりあえず、客間に布団敷いておくから寝る？顔色良くないよ。あ、その前に何か食べる？部屋は片付けとくよ」

ごみ箱が倒れ、そんなに入っていない中身が散らかったのと、畳んだ洗濯物が崩れているだけだ。

…その中に下着が混ざっているので早く出てって貰いたい。

顔色の悪い男を追いたて、客間に布団を敷く。

風呂は自分が入るつもりで用意は出来てたからいつでも入れるし、ご飯もまだある。よし、大丈夫。

「いつもすみません」

入浴を終えホコホコな男が出てきた。あまり静かすぎて湯舟で寝ていやしないかと心配したものだ。

「久しぶりだね」

元気そう、とは言えなかった顔色も入浴効果で良くなっている。残り物の肉ジャガと味噌汁を温めて、

よそったご飯と共に出す。箸の使い方も馴れたもの。一時期使った矯正箸ももう出番はなさそうだ。

「いただきます」

好物の肉ジャガから遠慮なく食べ出す男を見つめ、本当にしばらく男が来なかったと改めて思う。

だからこそ油断して、あの部屋に洗濯物を仕舞わず置いていた訳だが。

着ている父のパジャマは少し丈が足りず。だがそれもいつもの事だ。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

ぼんやりと見ている間に完食したらしい。お代わりはいるかという家主の問いには丁重に断った。

「正隆さんはもう御就寝ですか？」

ご挨拶をと続ける男の声を遮り、父はもういない事を告げる。

前に男が来た時は、少しだけ高血圧というだけだったはずの父が出先で倒れそのまま帰らぬ人となったのは一年も前の事。

済ませた一回忌も記憶に新しい。慌ただしい、あつという間の一年だった。

「そう、ですか。…お悔やみ申し上げます」

誰にそんな言葉を習ったのか、男は決まり文句をサラリと言う。それとも、アチラも同じ事を言うのだろうか。

「あれ？ででは、今、この家には」

「そう、私とあなたしかいないね」

拳動不審になった男に苦笑する。別に今さら、だろう。

「ああ、きちんと正隆さんに言うつもりでしたのに」

立派な角を付けた頭を抱えて、男は呻く。

何やらブツブツ言い続けていたが一応声をかけ、皿を下げて洗ってしまう。

そして自分も入浴を済ます。

ホコホコとリビングに戻ると、やっと男が顔を上げた。

「僕と結婚して下さい」

「は？」

何の冗談かと言いたかったがその目は真剣そのもの。元々充血していた目で迫力も増している。

展開がついて行けずにはかんと口を開ければ、なおも畳み掛けるように言葉を紡ぐ。

曰く、ずっと自分を想っていた。とか。

ずっと来れなかったのは実験が成功続きであった為。とか。

わざと失敗しても駄目で成功すると践んだ上でのまさかの失敗でも無い限り、もう来れなくなっていたと。

父には、前回来た時に打ち明けていた、と。男の気持ちに全く気付く事が無かった家主は、呆然と在りし日の父を思い出した。

男が来なくなり、しばらくした頃。

自分の事を遠くに嫁に行くと、そう決まった様に酔ってそう愚痴っていた。

承諾してた？

そして家主も、男の事は昔から好きだった。

結婚までは考えてはなかったが。

そう告げると、男は嬉々として説得し、二日後家主は姿を消した。

成功の成果

「くっ……また成功か」

「いやそれおかしいです先生。どう考えても失敗した台詞です」

出来上がった魔法薬は、それはそれは画期的なものだった。

完治は無理と言われるあの病の症状が消えて無くなったのだ。量産すれば多くの人が救われる事だろう。

だが、その偉業を成し遂げたはずの先生の反応はまるで失敗だったとでも言うような様子だ。

もうずっと、こんな感じで様々な魔法薬や道具を作っては成功し落ち込んでいる。

どれも素晴らしい機能や効能で、新しく何かを作る度に彼の名声は高まってゆくが本人はちつとも気にしていない。

弟子入り希望者は後を絶たず、だがその全てを断っている。

まだ無名な頃に入れた自分は幸運だと思う。

「とにかく、休んで下さい。何日寝てないんですか。

同時にいくつも手を出し過ぎです。この装置は僕が見てますから。そんなんじゃない、いつか大失敗しますよ」

何が、いけなかったのか。

寝不足の極みの目が、不気味に光った気がして思わずあがった悲鳴を喉の奥にしまい込む。

「…最低限、身嗜みは整えないとね」

ふと視線を外し、どうやら風呂屋に行ったらしい。あの風貌で外を歩いて警備隊に通報されないよう自分もついて行こうか。

そんな事を繰り返して、ついに心配していた事が起こった。過労による昏倒：ではなくて、先生に嫉妬したライバルが嫌がらせをしたのだ。窓が開いたと思ったら、放り込まれた沢山の猫に驚いた。

何てガキっば…いや、卑怯な！

無闇に追い立てても捕まえようとしても、思い通りにはならない生き物達は悔しいがライバルの思惑通の事をしてくれた。

投げられてパニックになった奴が走り、秘薬の瓶をことごとく倒したり大事な書き付けの束をめちやくちやししたり、実験中の装置を跳ねた衝撃で壊したり。

散々な目にあってふと見たら、先生の姿がどこにも無かった。

探しに探して二日後。ひよっこり帰って来たと思えば、傍らにいる女性を『嫁』と紹介しやがった。

どんだけマイペースだ先生！

「いいか、仕事中は耳を隠せよ。師匠命令だ」

『嫁』を貰った先生は、無茶を止め（『嫁』効果だと思われ）、一つずつ確実に研究をするようになった。

開発の速度は遅くなったが、今までが早過ぎただけで成功率は今のところ十割という驚異的なものだ。

また、ライバルが何かしないといいけれど。

そんな心配は今の所杞憂で、今日も訳の分からない指示に従い室内なのに帽子を被る。

耳が蒸れて嫌なんだけど。

その原因が、先生の頭にはえる立派な角に対して、自分の犬の様な耳が可愛いと『嫁』が呟いた事によるうっとうしい嫉妬だと知るのはもう少し後の事。

先生、懐があまり狭いと嫌われますよ。だなんて、冗談でも言えない日々に今日も僕はため息をつくのであった。

片思い

猫が好き。

と、知ったのは全くの偶然。

魔法薬係の開発者として、一応は名が通ってるアタシ。

事ある毎に顔突き合わす、世間ではライバルと言われてるアイツも、最近はその研究所に籠りきりで顔を見ない。

それが良いのか。

結果は、嫉妬する気も馬鹿らしくなるほど素晴らしいものだ。薬も道具も、新しい物を一つ開発するのに普通どれほど時間と労力がかかることか。

アツサリとそれを為すのに鼻にかける訳でも無く。

何かに取り付かれる様に、淡々と次々と、新しい物を生み出す。

もう、ライバルなんて呼ばれるのもおこがましい。

私が一方向的に思っている、まさに片思い。アイツはそれすら、眼中に無いんだろう。

毎日、無茶な実験を繰り返すアイツの研究所は徹夜続きなのか明かりが深夜も点きつ放しらしい。

唯一の弟子共々、近いうちに倒れやしないかと思うほど、時々出て来ては風呂屋に向かうアイツや弟子の顔色は悪かった。

少しでも和んで欲しくて、手なずけた猫をコッソリ送り込む。

誰がやったか分からない様、窓の鉤は跡の遺らない風魔法で空けた。それが、あんな事になるだなんて。

「おめでとう、素敵な人ね。何処でさらってきたの？」

二日、行方不明になった挙げ句に突如連れてきた花嫁と急いで結婚したアイツに呆れながらも、一応祝福の言葉をかける。

見たことが無い位、健康的な顔で。頭部の角を叩き割りたくなる様な笑みで惚気る花婿と、謎の花嫁。

「秘密です。可愛いでしょう？僕の花嫁は」

終始ニコやかなアイツには「ごちそうさま」と言うしか無かった。

「またあなたですか。生憎先生は居ませんよ」

今日も弟子には睨まれた。

嫁を貰ったアイツは、開発ペースを落とし、その分デートと洒落込むようになった。

今まで、花嫁とろくに出掛けた事もなかったらしい。

あんな実験三昧ならばそれも当然か。

そして研究所、兼自宅に残される弟子。

結婚なんか祝うんじゃないやなかった。

二人きりが気まずい。

猫を研究所に送った事はバレていた。研究や資料は駄目になった上、そのせいで何故かアイツが行方不明になっていたのだという。

研究を邪魔するつもりは無かったの。

誓って失敗を狙った訳じゃ。

「いい加減、諦めたらどうです？」

諦められないから、来ているの。

「先生、奥さんしか目に入ってますんよ？」

知ってるわ。

でも

「アタシが会いに来てるのは、アナタなのよ？」

あ、本気で気が付いて無かったみたい。

へこむなあ。

ライバルとしてなら、顔を合わすのに不自然じゃなかったの。

共同研究すらしらないアイツに会う口実って、アタシにはそれしか無かったの。

アナタは、アイツよりも外に出ないし。アナタを見ていらなくて、下を向いたアタシは知らなかった。

猫好きなアナタの顔色が、ばら色に染まった事を。

助けて下さい

「勇者さま、助けて下さい」

「断る」

「やった、ありがとうございます……あれ？」

とつさに断る言葉が出せた自分の反射神経に感謝する。

いつもいつも厄介事を持ち込む兄弟のお陰だと思つと複雑な気分だが。

「そ、そんな。どうして」

がつくりと分かりやすく肩を落とす子供は外国人のようだ。日本語が達者である。二世かな。

「勇者ゴツコは他をあたね。付き合ってくれる友達くらいいるだろう」

しかも人気がありそうな勇者ポジションは譲るといふのなら、喧嘩も起きまい。

まあ、悪役が不人気で誰もやりたがらずそれはそれで喧嘩になる事もあるが。

「あれえ、おかしいなあ。この年代の人間なら喜んで引き受けるって…」

子供の手には知らない文字で記されたハードカバーの古めかしい本があった。

小道具にやけにこだわりを感じる。

ぶつぶつ本とにらめっこの子供を無視して、さあ家に帰ろうと一歩踏み出し、

「ここはどこだ？」

と、己の状況にようやく気が付いた。
全く知らない場所にいたからだ。

「ここは僕の国ですつ。名前はロンファンフィニーって言って、勇者さまのいた所と違う世界なんです」

子供がすかさず設定を説明する。

さつきまで普通に近所を歩いていたはずで、ボンヤリしていた訳でもなくいきなり見知らぬ場所にたどり着くなんてありえない。

「だから、僕が召喚したんですよ勇者さま」

「あくまで勇者ゴツコを付き合わせるつもりか他を当たれアイスが溶ける」

下の弟に出かけに捕まって頼まれたアイスが、溶けてしまっていた

らネチネチとつるさく愚痴られる。
自分で行けばいいのにあの軟弱者。

「あいす？あいすって何ですか？」

キラんと目を輝かせて子供が詰め寄る。

「アイスはアイスだ。箱で買ったが保冷剤はあんまり貰って無い、
て。勝手に漁るな！」

「わっ、冷たい。氷の菓子ですか。勇者さまはこういうのを食べて
るんですね」

「アイスが主食みたいに言うな。コラ箱を開けるな」

「じゃあ、普段は何を食べてるんです？」

「主食はご飯だ。昼は冷し中華だったが夕飯は麻婆茄子にで…勝手に
食べるな！」

「うわぁ、これおいしいです。さすが勇者さま」

「お前『勇者』扱いすれば何でも許されるとでも思ってるのか？ア
イス代払え！」

「勇者さまの国の通貨はもってないけど、これはお礼です。また助
けて下さいね」

小さな手で何か丸い物を握らせると、子供はさよっならと手を振っ

た。

そして、いきなり消えた。

じゃわじゃわと鳴く蝉の声に我に返ると、元の位置に佇む自分がいた。

手元のビニール袋の中のアイスの箱は空いていて、中身が一本足りなかった。

「どうせなら、私の趣味の方を開ければ良かったのに」ああ、面倒臭い。溶けた言い訳共々面倒臭い。

「勇者さま助けて下さい」

「またお前かーっ！何でそういつもいつも人が食べ物持ってる時に呼ぶんだ」

「勇者さまの国の食べ物っておいしいですね！今日のは何て言うんです？」

「コラ！勝手に食べるな私の牛乳寒天っ」

その後、毎日呼び出される事になってしまった『勇者』として。

「助けて」の内容は、子供の宿題の手伝いだとか。ふざけるな。

「たかが宿題だろうが。何でいちいち勇者扱いをする」

「えー僕、召喚って『勇者』しか出来ないもの。それに宿題は『召喚した生物の観察日誌』ですし」

何と知らない間に観察日誌をつけられていたらしい。
朝顔とか向日葵とかにしておけそういうのは。

ん？『勇者』しか出来ない？

嫌な予感によく当たる。

いい加減、異なる世界への瞬間移動されている事は理解していたが『勇者』はさすがにゴツゴ扱いしてスルーだった。

「だから、もし魔王が甦ったりしたらお願いしますね」勇者「さま」
にこやかに笑う子供に戦慄を覚える。

「そんなの引き受けるものか。か弱い乙女に何をさせる」

「当分大丈夫ですよー。だから僕の宿題、協力して下さいね？」

何が、だからなのか解らないまま子供の宿題とやらの手伝いをする
はめになった近藤絢香、十五歳、剣道部副部長。

最初に持たされた綺麗な丸い石が変化して『勇者の剣』になるまで
一年と少し。

「当分『魔王』なんか甦ったりしないって言ってたじゃないか！」

「助けて下さい『勇者』さま」

「お前が王かー！ー！」

「最初に言ったじゃないですか。僕の国だって」

「そんなの覚えてないっ！だいたいいつまで宿題やってるんだ？もうかれこれ一年経つぞ」

毎日呼び出される身にもなれ、と子供、いや国王に詰め寄ると、

「宿題自体はもうとっくに終わりましたよ。けれど召喚の契約は一生ですから」

と、元の世界では自分以外には見えない『勇者の剣』と変化した、離れない綺麗な丸い石を指して、大変ニコヤカに言い切った。

物の交換で契約が成立するなんて知らないしあれじゃ詐欺だと訴えるものの、のらくらとかわされて気が付けば本当に『勇者』にされていて、さらにあれよあれよと言う間に『魔王』討伐に成功し（どす黒いゲル状の何かだった）、英雄になって五年、国王の妻になっていた。

あれ？

…の、事で被る害は。

ぴょーう、ぴょーう

ドン、ドドン

ババン！ババババン！

遠くから聞こえる笛の音と、時折景気よく打ち上げられる花火、そして子供と青年団で放る景気付けの爆竹の音。

漂ってくる火薬の匂いに、今年もここに来たのだなとそつとため息をつく。

心の底から来たくは無かったが、これもじじばば孝行だ仕方ない。

お盆は旅行で来れなかったのだから、祭だけでも来てと言われたら弱い。

決して、振る舞われるご馳走目当てなんかじゃない。

それに最大の問題のヤツは、今年から青年団に入って祭のあれこれで忙しいらしい。

きつと朝から夜まで居ないだろう。居ないに違いない。居ないで！

「おつ、よう来たな！」元凶の声が後ろから聞こえ、安全確保の為急いで振り返ったがすでに遅かった。

ババババババババ！
「んぎゃああああっ?!」

あろうことか久しぶりに会う従妹の足元に、会って早々爆竹を放つておいて慌てる反応を高らかに笑うヤツはとっくに成人を過ぎたこの家のご長男だ。

こんなヤツがこの家の跡取りとか泣けてくる。

コイツに会うと嫌な思いが増える一方なので、来たくも会いたくも無かったというのに。もう見付かってしまつて帰りたくなりましてよじーさまばーさま。

「ダメですよー、忍者でしたらこれくらい避けられないとー」
会いたく無かったヤツその2もセットで現れた。くそう。今年はコイツも来ていたのか。

この平成の世の中に、未だに忍者の存在を信じているイタイ外国人だ。ちなみにサムライも信じている。

留学先の日本で従兄弟と友人となった人で、日本ダイスキー。な人。

……まあ、それはいい。観光や勉強で日本に訪れ文化に触れる事はいい事だ。

どうぞよく見ていつて欲しい。

そしていい加減、現代に武士や忍者はいないんだって学んで知って

欲しい。

いきなりブワツと布か何かが目の前を遮る。 ななな何？

「……あれ、消えませんか。 本当に一般人の振りがお上手ですねー」

マジックじゃないんだから、タネも仕込みも無く消えるか！

被せられた風呂敷を取り除き、現状を認めない従兄の友人と従兄本人を睨む。 いきなり何すんだ毎度の事だけどさー。

もうね。 残念な美形とはこいつらを指すのかと、しみじみ思う父の実家に来る度に。

本当、人間は顔じゃ無い。 こいつらといると一秒だって安らげない。 従兄はいつもあんな調子だし、奴の友人達もあれが通常運転なんだから始末に終えない。

初対面。 紹介で、初めまして。 の後に「忍者と会うのは初めてなので緊張します」なんて無駄に頬を染め爽やかに挨拶されるとは全くの予想外だったよ。

ええ。 先祖に忍者がいたらしいのは聞いてはおりますが。

そんな世間に知られた、誰でも分かる有名なんじゃないですよ？ しかも先祖が！って話なんです。

私は忍者じゃありません。 それに、あくまで『らしい』だし。 母方

のご先祖らしいけど小さい時に亡くなった母の思い出はごく少ない生前、ここに遊びに来ていた時にその話を母がしていたと従兄が覚えていて、日本ダイスキな外国人と友達になるたびに私を忍者として紹介するのはどうかと思います。

手裏剣、投げませんし持つてません。

実は変装している訳でもありませんから顔を触るのは止めて下さい。空も飛びません。水の上歩きません。跳躍力もごく普通です。だから、移動時に消えたりしませんよ。

巻物渡されて期待されてもくわえませんよ？もちろん巨大蛙にも乗りません。いたら気絶出来る気がする。

火も吹けません。土に潜って移動とかしません。ナニソレ。ドラゴン？モグラ？

白刃取り出来ません。刃物危ないから向けないで下さい切り掛かって来るなんて論外です！

どんなに言っただけ聞いても、こう…分かってる。分かってるよって顔して『そうだよね。そんなに簡単に正体がバレたら大変なものね』って、分かってないいいいい！

おまけに忍者像、色々間違えてる！！

って、参考資料が日本の書物や画像だから始末悪い。

あれは、フィクション、なの！

外国人の友達も多い従兄が連れて来るのは、たいてい忍者スキーで、私の祖先の事を知っていて、かつ私が忍者だと思い込んでいる…のはそうやって紹介するからだ！従兄め！

中でも特に思い込みが激しいこの人が私はとても苦手。

忍者にどんな夢を見ているのか。期待が過剰で接触も過剰。武器は隠し持って無いので、乙女のボディチェックは止めてくださいってんだこの痴漢！その従兄！鼻で笑わない！

だんだん過剰になってくる忍者スキー達の振る舞いに、私が身の危険を感じたのは乙女として当然だと主張したい。

だから、護身術を習い始めて、痴漢から逃れる技が出たのは許容範囲を大きく越えたからであって自業自得なんだと言いたい。

だから

「スゴイ…！これが忍びの技！」ひっくり返って喜ばないで！
それ忍者関係無い！

これにより、一層のしつこさを増してしまった従兄の友人が入り浸る為、益々父の実家に来る足が遠退くのであった。
て、まだじーさまばーさまに会ってないいいい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5213s/>

短編しゅう

2011年10月23日23時07分発行